

## 2004年熊本大学ハーン展示会・講演会のこと

西川 盛雄

ホップ・ステップ・ジャンプがこの事業を始めるときのキーワードであった。一年目はおずおず、二年目は少し確信をもって、そして三年目は胸を張ってという三年計画の意気込みであった。

学内（附属図書館、五高記念館）にある資料をリストして一年目は手探りながらも無事盛会のうちに事業を締めくくることができた。二年目にはアイルランド大使が熊本大学にアイルランドの書物を寄贈して下さるために来熊なされたのと時期が重なり、展示会、講演会の初日にスピーチをしていただくという幸運に恵まれ、充実した船出であった。平成16年（2004）は開会時の講演としてははじめて外部からハーン没後百年と絡めた講演を得ることができた。

内容は熊本大学が所蔵しているハーン関係資料の一般公開（展示会）と大学内のハーン研究者による開会時と閉会時におけるそれぞれの講演会である。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）をもっと親しく知り、理解を深めていただくために熊本大学による地域への貢献を念頭においた企画である。

時期は秋であった。ハーンの命日が9月26日で秋の頃が相応しいと考えたからである。会場は一昨年、昨年と附属図書館中央館であったが、平成16年度はハーン没後百年という記念すべき節目の年ということで、彼が実際に教鞭を執っていた五高記念館で行うことにした。

期間は10月13日（水）から10月28日（木）までの16日間であった。展示会は概ね無事終えたが、台風23号の影響で途中の一日（20日）を休館にせざるを得なかったことをここに記しておきたい。

附属図書館には熊本大学学術資料調査研究推進室が併設されており、ここには特定研究テーマと



ラフカディオ・ハーン

して三つの研究の柱がある。有機水銀中毒による水俣病関係資料の研究、永青文庫を始めとする貴重な古文書史料の整理と分析を軸とした研究、それにラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の資料整備とその研究である。

ハーン研究については、熊本大学の小泉八雲研究会のメンバーが研究推進室メンバーとして、当初から参画協力して今日まで来ており、すでに『ラフカディオ・ハーン再考』（1993年）『続ラフカディオ・ハーン再考』（1999年）を上梓し、今日まで学術的にも評価されて来ている。

開会時の講演には熊本市の小泉八雲旧居の宮崎

啓子館長に来ていただき、『ハーン没後百年と八雲旧居』というタイトルで五高記念館の教室を使い、ハーンの生涯の概略と第五高等学校の教師として熊本に滞在していたことの意味と、明治27年1月に全校生徒に向けて行った『極東の将来』の結語の部分に触れて貴重な話をしていただいた。せっかくの機会でもあり、学生にも講演内容を聞かせたいという趣旨から授業の一環として学生諸君の参加を促し、ハーンへの理解を深めてもらった。

記念館の展示会場は一階の二教室を使い、それぞれの部屋にガラスケースを三つ配置し、最初は熊本時代の資料、次の部屋にはアメリカ時代の資料を中心に展示物の配列を行った。大学所蔵の貴重なハーン作品の初版本、ハーン直筆の試験問題、嘉納治五郎校長を加藤神社で送別した時の集合写真（ここにはハーンの他嘉納治五郎、秋月胤永先生等が写っている）、ハーンがシンシナティ時代に書いた新聞記事のオリジナル（これは『シンシナティ・エンクワイアラー』紙と『シンシナティ・コマーシャル』紙で、実業家の檜山茂氏から熊本大学に寄贈を受けたもの）、第五高等学校時代の各種公文書資料、シンシナティとニューオリンズのハーンが居た頃の古地図（複製版）、秋月胤永の油絵の肖像画、ハーンがシンシナティで同僚のファーニーと発行した雑誌『イ・ジグランプス』（復刻版）、ハーンの肖像画、図書館報『東光原』に書いた熊本大学小泉八雲研究会のメンバーによるハーンの解説文の拡大パネル、当時の五高生の寮生活を写し出したパネル写真など、さまざまな角度から展示品の選択とレイアウトに工夫を凝らしてみた。期間中は終始受付を置き、来訪者への対応とセキュリティに配慮した。

展示期間中の来訪者は、授業の一環として二回の講演を聴いた学生を含む117人を除いて405人に達し、充実したものとなった。何よりも一般の方々の来訪が多かったことは、人々のハーンや五

高記念館への関心の深さを示唆しており今後の参考になるものと思われる。

これより先9月25日に、熊本大学主催の没後百年ハーン顕彰のためのハーン・レリーフ贈呈・除幕式を中心に多くのことが行われた。工学部百周年記念館で行われた曾孫小泉凡先生によるハーン講演会『没後百年、ハーンの未来性』は身内の立場からみたハーンの興味深い話があった。続いて行われた岩岡中正附属図書館長の司会による、4人のパネリストによるハーン・シンポジウム『ハーンからの伝言=21世紀に向けて（近代化再考）=』では、ハーンの21世紀における現代的な意味をめぐって議論を深めることができた。今回の五高記念館における附属図書館主催のハーン展示会・講演会は先行事業と連動した大学主催の一連のハーン事業の一環であったといえよう。

最後の閉会講演は西川が『ハーンの遺産』というテーマで行った。ハーンは家族を中心にした人間の絆とモラルを大切にすることを伝えたが、これは混沌として犯罪や戦の止まぬ現代社会への警鐘としてハーン作品が読めることを説き、同時にジャーナリストという視点でハーンは日本をその心で取材・理解し、これを『東の国から』西洋に向かって暖かい『心』で作品を西洋に紹介し、結果として西洋と東洋の橋渡しをした存在として位置づけられることを指摘させていただいた。

平成16年度はジャンプの年であった。この年に五高記念館でハーンの展示会・講演会を行うことが出来たのは幸いであった。これで三年間続けたこの事業にひとまずコンマを打つことになるが、今後はこれをさらに発展させたものを考えていかなければならないであろう。大学は終始研究と教育の場である。そのことを前提にしたうえで、大学の社会貢献のあり方として国際性と地域性という二本の柱は今後もますます重要なものとなっていくに違いない。

（にしかわ もりお 教育学部教授）